

まえがき

グローバル化の進展はヒト、カネ、モノの移動に影響を与えている。また、グローバル化によって、多くの企業が海外に進出することになった。とくに、製造業では国を越えた国際分業体制を整え、世界中から原材料や部品を調達し、生産活動をおこなうようになっている。この生産活動を支えるのが国際物流であり、製造業の国際分業体制の確立は効率的な国際物流体制が確立してはじめて成立する。

この国際物流がおこなわれる輸送手段としては、陸上輸送、航空輸送、そして海上輸送の3手段が考えられる。そのなかでも、海上輸送はもっとも多くの物資の輸送をおこない、国際物流の中心であるといっても過言ではない。また、海上輸送は船舶によっておこなわれ、船舶は港湾に接岸する。その意味で、海上輸送は船舶と港湾なしでは成り立たない。とくに、港湾は整備されなければ、効率的な陸上作業ができない。効率的な作業体制が整ってこそ、製造業に従事する企業から貨物を集めることが可能である。また、効率的な陸上作業がなければ、船舶が寄港しない。効率的な国際物流をおこなうためには、港湾やそれに関係する施設などインフラの整備は必須条件である。

今では港湾の貨物取扱上位にはアジアにある港湾が多くランクされている。このことはアジアにおける港湾が整備され、発展した結果とみてよい。そのアジアにおける海上輸送の現状はどうなっているのか、あるいはアジアの主要港湾での現状や課題を検討することは、国際物流を考えるうえで重要な課題のひとつであるといってもよい。

この課題にこたえるために、日本貿易振興機構アジア経済研究所では2011～2012年度の2年間にわたり、「アジアにおける海上輸送と港湾」研究会を組織した。本書は、その成果の一部を出版したものである。研究会では松尾俊彦（東海大学海洋学部教授〈当時〉（現、大阪商業大学総合経営学部教授））、津守貴之（岡山大学社会文化科学研究科准教授）、西村悦子（神

戸大学大学院海事科学研究科准教授)、池田龍彦(横浜国立大学統合的海洋教育・研究センター長〈当時〉(現、名誉教授、放送大学神奈川学習センター所長)),石原伸志(東海大学海洋学部教授)の各先生方にご出席いただき、報告をしていただいた。これらの先生方は海上輸送や港湾について大学で研究されており、研究の成果をまとめるにあたっての示唆だけではなく、研究会ではカバーしきれなかった分野や地域の貴重な意見を拝聴することができた。記して謝意を申し上げたい。

また、小栗道明(ジェトロ本部企画部事業推進主幹)、森永正裕(研究企画部研究業務調整室課長代理)、坪田建明(新領域研究センター)、柴田つばさ(開発研究センター)の各氏が研究会のオブザーバーとして参加し、研究会運営や議論に大きな貢献をされた。

さらに、委員は担当国を中心に現地調査をおこなった。本書には現地調査の成果も当然ながら含まれている。現地調査では政府機関、研究機関、船社をはじめとした企業を訪問させていただき、海上輸送や港湾に関する多くのことを知る機会ともなった。訪問を快く受け入れ、応対くださった方々にもお礼を申し上げたい。

本書が、アジアの海上輸送や北東アジアを中心とした港湾の現状と課題を理解する一助となれば、幸いである。

2013年11月

編者